

無寸草主人



追悼—岡本力氏—

Grasshouse

いつも何かを作っては壊し、作っては壊ししているのに、爪は汚れているし、足取りは千鳥足、素面のときでもまっすぐ歩いているのを見たことがない。不規則な食事のためか、酒ばかり飲んでいたせいも、痩せたり太ったり、むくんだり、へっこんだりを、あの小柄な体で繰り返していた。

妙な街にひょっこり現れ、妙なものをこさえて、いつのまにやら消えていく、そんなことばかりやっていた。

オカモト・チカラ氏が、あの独創的とも珍奇ともいえる不思議なオブジェ屋台を引いている姿は、長年年期の入った屋台のおやじとも思えたし、アバンギャルドなアーティストとも見られたし、あるいは町の奇人とも思われた。

あまりにも機能的に管理され、実利的すぎて面白味のない日本の世の中のはじっこを、彼はとぼけた昼間の蛍のように、ふわふわと斜めに飛んでいった。

小さなクレーンから鉄瓶が下がっていたり、テーブルの真ん中に竹林があったり、屋根にノキシノブや菜の花が生えていたりするこの珍妙な屋台のメニューは、抹茶と和菓子、夜になると日本酒とスルメだ。

「いやあ、ワタシのは、ワビ、サビの世界ですから」

と、気弱に照れたように、岡本さんは肩をそびやかし、ヒックヒックと笑う。そのたびに、金齒が覗く。「ワタシ」の発音はときに「あたし」に聞こえた。

江戸ッ子。

生まれたのは宮城だが、物心ついたときからは表参道で育ったそうだ。

東京オリンピック前の原宿周辺の原っぱは、彼にとっては懐かしい遊び場だった。だから表参道で屋台を出すのは、隠れんぼや戦争ごっこの延長だったのだ。

彼の作品は、単なる「ワビ、サビ」ではなかった。

ダダイズムやシュールレアリズムを「ワビ、サビ」で軽くくるみ、デュシャンやティンゲリーの造形感覚と、蕪村や山頭火の精神性とが、奇妙にとけあっていた。童話的なユーモアに満ち、年季の入った素材との孤独な対話があり、詩と批評があった—なんていったら、墓石の下の岡本さんは、まぜっ返すだろうか。

「そんな、大したもんじゃ、ないんです」

喉の奥から絞り出すような嘎れた声。なんだか年をとるタイミングを失ってしまった少年のような寂しさと虚無感があり、その眼の純真さと目尻の皺とが、この人の私的な苦勞を刻み込んでいるような印象を与えた。

「岡本さんを見てるとね、あたし、中原中也を連想するの」

とある女性はいった。

背格好は別としても、中也ほどナルシストでもないし、気負ってもいない。きつすぎる毒も吐かない。飲み屋で酔客にからんで、とっ組み合いという展開もない。詩人の才走りというより、カウンターの片隅の酔客の哀愁があった。

とはいえ、何だか一度、黒マントに黒い帽子といういで立ちで、屋台を引かせてみたかったような……。

バブルの日陰に寄り添って

東京という膨大な瓦礫の山みたいな街に、自分だけに分かるいたずらを仕掛け、してやったりとほくそ笑み、冷たいビル風に吹かれているうち、そのいたずらも虚しくなって、ぷいっと、どこかへと去ってしまう。砂場で遊びあきて、つまんなくなっちゃった子供のように。

『半分亭』といったっけ。下北沢に出現した幻の屋台。

路地の片隅、吹きっさらしの三畳ほどの一角。竹のお猪口に注いだ純米酒に、炭火で焼いた煙い干物。寒空の下だけど、昔のアングラ演劇みたいな奇妙な空間。

「客、来たの？」

「い、いやあ、きょうはまだ二人目」

「寒いね。寒波が来てるんだって」

「ああ、そうね。ここにいると、こ、腰が冷えてねえ。……あ。あ。風よけ、作ったから」

店主は炭片をひっくりかえす手を休め、ごそごとベニヤ板を立て掛ける。

ときおり外人がびっくりしたように覗き込み、そこに日本の美かなんかを見いだして、入ろうか入るまいかと躊躇している。でもこんな狭苦しいところに潜りこむには、少々図体がデカ過ぎた。

いつのまにやら、熱心な女性ファンもついた。美人がいたら、キッチュなわびさび前衛屋台が、華やいだ。干物や漬物以外、食べるものなどなにもないし、客としては割に合わない。ほとんど軽犯罪、非合法スレスレの店。でも、一度入る

と二度三度。みんな、接待やら、企画書やら、販売促進やら、サラリーマン稼業やらにうんざりして、ここに漂流してきたのだ。

小さな屋台の天井からは茶色く錆びた鉄瓶が吊るされ、屋台の中に数本の竹が生えていた。箱庭的な俳諧味のある風流なオブジェ。これは、何号機だったっけ。

岡本さんは自作のオリジナル屋台に、1号機、2号機、3号機とナンバーをつけていた。たしか1号機は、ながらく表参道同潤会アパート裏の藪の中で覆いをかけられ、雨ざらしのまま放っておかれたように思う。

「ごめん、岡ちゃん。お茶碗割っちゃった」

その美女のひとりが、両手で口を覆う。

「あ、いいんです、いいんです。えへへ。……カ、カタチあるものは、いつか、壊れますから」

あなたも不意に、壊れてしまった。

カタカタと頼りなげに動く、岡本力作のゼンマイ仕掛けのおもちゃじみたオブジェのように。

——カタカタカタカタ、カタカタ、パタリ。

「起きろ！」

八月十九日の夜、友人から岡本力氏の訃報を聞いた。

「そんな、阿呆な」

という言葉が、口から出かかった。知人の中でいちばん死ぬのが似合いそうもないのは、岡本さんだったからだ。生まれるとか死ぬとか、そんな生理現象とは無縁の、コロボックルや、座敷童子の類い、とまでいってしまったのは失礼か。

この人は八十歳まで、妙な、アートともおもちゃともつかないオブジェを作って、ずっと金にならないものを作って、そうして最後に一冊だけ魅力的なオブジェ作品の写真集を出版して、ちょっとだけ名前が知れて、小さなファンができて、静かで幸福な晩年を過ごしていくのだろう、ははーん、妙ちきりんなじじいが出来上がるわい、と、わたしはそんな勝手なストーリーを作りあげていた。

それが、違った。

「そんな、阿呆な」

おそらくその日の夜ふけ、下北沢、新宿、世田谷界隈の岡本力氏を知る者の間で、無数の小さな絶句が電話口で反復されたに違いない。

直腸癌。五十二歳。何でまた……。

その二、三日前は、友人たちと普段のまま会話していたという。退院して、すぐだった。半年ほど前、下北沢の駅のプラットフォームでばったりあったのが、わたしとしては最後というわけだ。

起承転結にも何にも、なってやしない。

人生が起承転結として格好がつくもんだと信じ込んでいるのは、どうやらいつも生きている間の当人だけらしい。傍からみりゃ、どれもこれも未完成な、壊れたような不満足な死だ。

だから通夜のとき誰かが「岡もっちゃん、起きろ！」としきりに棺の中の岡本さんに向かって叫んでいた。何のことはない。飲み屋でへべれけになってつぶれている岡本さんを起こしているという格好だ。

— いや、あの、た、大したことじゃなくて。ただ、ちょ、ちょっと疲れちゃって。あ、みなさん、やっててください。

ウチは、純米酒ですから。ワタシゃここで、寝てますから。

狭いけど、居心地がいいし。へ、へ、へ。花が、ちょっといっぱいあって。いい匂いがして、何だか……。

遺影の岡本さんと、実物だけど動かなくなった岡本さん。

何だか、どっちも作品みたいだ。薄く笑っているような、歯を出して目を閉じて、古い童謡でも歌っているような。

それにしちゃ、やけに色が白すぎるじゃないか。

奇妙な家、奇妙な夫婦

千歳船橋の住宅街にあるその家は、遠くから見ると黒塗りの何の変哲もない家だった。彼の連れ合いのお京さんが亡くなったとき、わたしは初めてその家に行った。岡本さんはよく、目の見えないお京さんの手を引いて、小田急沿線のあち

こちの飲み屋を訪れていた。小柄で年よりも若く見える岡本さんのせいで、このカップルは親子のように見えないこともなかった。

手を取り合い、足元に注意しながら、ゆっくりと、ゆっくりと、ふたりは歩いた。

昔、女性としてはまだ珍しい時代に、ジャーナリストをしていたという男勝りのお京さんだが、亡くなる前は鍼灸を職業としていた。腕がよく、なかなか繁盛していたらしい。彼女が相当な酒豪なのであった。それも体を悪くする原因のひ

とつだったらしいが。

「ああ、今日は、××君が来てるのね。あら、××さんも見えてるのね」

手を取られ席に座らせられると、お京さんは首を伸ばし、うっすらとした微笑を浮かべながら見えない目あたりを伺い、小声で岡本さんに一人一人確認をする。聞こえてくる声の感触で、本日の客の顔ぶれを確かめているのだ。彼女は、

よく肉声で人の性格を判断した。そして本人しか分からないところを、優しく指摘した。

当の連れ合いのいない席で、あるとき何の脈絡もなく、お京さんは宙を追うような目をして、若かった日々を語り出し、桃色に上気した顔でつぶやいた。

「魅力的な男よ、凄く。岡本は」

そのお京さんの葬式が済んでしばらくして、わたしはしょげている岡本さんの景気づけに、お酒を片手に訪れた。

初めて入った家の内部は、主人の好みといたずらっ気で、統一されていた。大家さんに借りている部屋なのに、内部は改造を重ね、得意の「野地板」でログキャビンだか何だか分からないものに仕立て上げ、このとんでもない借り主は、膝

を抱えて壁や天井を見回し、ひとり悦に入っていた。おそらくこれも、契約違反だろう。××ホームのような規格品ではない、サニタリークリーンのぴっかぴかではない独自の家。

小動物の巣箱に近い空間。

「野地板ってえのは、最低の、安い板でね。壁の裏っかわに使うやつで……。だから、ま、いろいろと使えるんです」

野地板という言葉も、それでわたしは教えてもらった。

あちこちに覗き窓やら小さな戸棚があり、車のついた手製の椅子などがあった。がらんとした広い木造の空間の片面には、人一人横たわれるくらいの屋根裏部屋があり、忍者屋敷のように梯子で登っていくことができた。そこに空けた壁の

穴から、往来を覗き見できるのだ。岡本さんは、自分で登ってみせ、蜂の幼虫のように丸くなってそのへっこみに潜り込み、首を覗かせ、ヘッヘッと笑ってみせた。

いい年をして、この人はまったく何を考えているんだか—。

さまざまな宝物

酒を飲みながら退屈しのぎに見せてくれたのが、過去のオブジェ作品や、父親の絵葉書だ。

岡本さんの親父さんは、明治以来の著名な財閥Ⅰ家の出入りの建築家、兼大工、兼何でも屋、だったそう。風呂場の具合が悪いと、Ⅰ家の当主が電話一本で親父さんを呼び付けたという。その親父さんの若い頃、出張先の東北の建築現場から、まだ幼児だった「カ君＝チーちゃん」に送っていたおびただし絵葉書が残っているのだ。絵と墨文字の文章。水彩だが、岡本一平のポンチ絵ふうのゆるやかな線と、ムンクのどろっとしたような色の濁り。時代の気分とでもいうものがたちこめ、単なるシロウトの絵とは思われない個性があった。わたしは絵葉書を手に取りながら、昔の家族は家族らしく生活していたんだなァという感慨を受けていた。いまの家族は、こんなふうな濃密なやりとりはしない。それがテレビや、マスメディアや、携帯電話のせいだとは、いいたくはないが。

新中野の民家の二階を改造したギャラリー『無寸草』オープニングの際、この絵葉書が展示された。

この親父さんは慶応大学図書館の増改築にも関わったそうだが、驚かされたのはその著名な財閥のⅠ家の仏壇の設計図が残っていることだった。

さすがにⅠ家。大規模、豪奢、壮麗きわまりないというか、それは複雑な構成を持つ美術品であった。

「へーえ。これってほとんど、日本の近代史の資料のひとつじゃない」

「え、え。いや。まあ。とりあえず、そういうのも、残っていたりして」

岡本さんは、肩を斜めにしてそびやかし、ヒックヒックと照れたように笑った。

考えてみると岡本さんが屋台を引いてあちこちの街に出没していたのは、日本の社会が、バブルだの投機だの土地転がしだのといって熱帯夜じみた夢の中で騒然としていた時期と、ほぼ一致していたかもしれない。

1号機の出現は十年前の八七年。そして2号機、3号機。それぞれ『驢輪愚亭』、『0庵』、『半日亭』と名付けられた車輪のついたオブジェ。表参道や馬事公園、下北沢に出現したあれらの幻の屋台は一体、何だったのだろうか。

商売なのか。それともアートだったのか。本人はもちろん作品というだろう。しかしどうやら、うすうすそれが商売としてもけっこう当たって、実利の方でもそれなりの成果を収め得る、とでも考えていたようなフシも、ないではなかった。

世の中そんなに甘くないのは、本人が一番分かっていただろうに。彼にとって、河原で拾った石を売るという、つげ義春の『無能の人』の物語は、まったく他人事ではなかったのだ。

「さっき、が、外人がね。いっしょに、写真撮ってくれてってね。ヘッヘッヘ」

岡本さんはからだを斜めに傾けながら、表参道のけやきの下で、笑いながら手拭いで顔を拭いていた。直立している姿勢に、どうやら照れるくちなのだ。

1号機は、TVにもちょっと映されたことがあったし、園芸雑誌でも何ページか、紹介されたことがあった。

わたしは資料集めと称して会社を抜け出し、同潤会アパート前の1号機『驢輪愚亭』で抹茶を啜った。二、三人の客がいるときもあったし、誰もいないところにぽつんと彼が立ち尽くしているときもあった。この屋台も、千歳船橋の部屋から、岡本さんがひとりではるばる表参道まで引いてきたものなのだ。

「最近、ペットの、か、棺桶ってのを、構想していて。ヘッヘッヘ。あ、いや、犬猫の、棺桶。いま、ペット人口が凄いから」

茶筌を素早く動かしながら、岡本さんが上機嫌でいう。

「ああ、それは当たるかも知れないなあ」

わたしは、小さな髭をぴんと張ったまま目を閉じている子猫や子犬たちの静かな姿を思い描いた。脱色した水色の静謐な木箱の群れ。童話的なユーモアと、背景にある虚無感と、生そのものの不安。

ああ、なるほどなァ、これはまったく、岡本力的世界だ。

「いや。あの。オートクチュールでね、へへへ。その人のペットだけの、特別なヤツをね、製作するという……」

「なるほどねえ。案外、いけるかもね。ホント」

けやき並木の木洩れ陽。『驢輪愚亭』の屋根には苔やノキシノブが生え、繊細な葉を微風にふるわせていい緑色をしていた。

*

知らせがあった翌日、八月二十日の夜、ぞろぞろと新中野の駅から、アートギャラリー『無寸草』へと続く舗道を、薄闇の中、釈然としない顔をした人々が歩いていった。地下鉄の駅を上がるとすぐに、「岡本家」という筆書きの文字がこちらを睨んでいた。

舗道を辿っていくと黒い礼服を着た人々が数人立って話し込んでいた。見覚えのある狭い路地に入って、『無寸草』の軋む階段を昇る。一名前がよくなかったのか。無寸草だなんて。縁起でもない。

しかし彼の言葉への好みは、どこかネガティブな陰りやくすみや断念を帯びたものに限られていた。あからさまな生命力に翳りを与える微妙なニュアンス。

オブジェ屋台の1号機、2号機、3号機が解体されてこの世に存在しない今、岡本力の代表作といえば、この『無寸草』というアートスペースということになるのだろう。土壁と廃材で作られたオカモト的異空間。

しかし、ギャラリーを持ち、定着してしまうというスタイルが、あるいはあなたの天性にどこか反するところがあったのではないかという邪推が、いまもって消え去らない。

— じゃあ、ずうっと、や、屋台を引きつづけろ、ってんだな。何だよ。ヒ、ヒトのことだと思って。ヘッヘッ。

さまよえる、オカモト・チカラ。

『無寸草』の二階。挨拶を交わす人々。ひそひそ声と、すすり泣き。

岡本さんの身体は、『無寸草』という大きな木箱の中に据えられた小さな木箱の中に、ちんまりと納まっていた。目を閉じ、半ば口を開け。

ギャラリーの展示は、そのまま続行されている。誰かの写真展だ。無数の写真が、土壁に貼られて、思い思いの角度でめくれ上がっている。貧しい南インドの子供たちの肖像群。ゆるやかに首を振る扇風機。実物のひょうたんの中にセットされた照明。不可思議な演劇空間のようところで、岡本さんは自作自演の無言劇を行っているようだった。

土壁で囲まれた仄暗い空間に、あの嘎れた声だけが響いてくる。

— いいんです。いいんです。……カ、カタチあるものは、いつか、こ、壊れますから—。

だったら岡本さんはなぜ、あれら無数のカタチを、作ったのか。壊れてしまうカタチを、そうと意識しつつ造形するという行為は、いわば虚無を生き続けるということではないのか。せめて屋台の一台でも、そのままのカタチを残しておい

てくれれば、生きている者たちの、ささやかな止まり木ぐらいにはなったろうに。遺作の屋台を囲んで、月夜の晩、どこかでしんみりと飲み明かすことも、できたらうに。

素材を買う金がないので、彼は2号機を作るために1号機を解体し、3号機を作るために、2号機を分解した。

カタチあるものは、いつか.....

下北沢の飲み屋のママさんが『岡本力に捧げる詩』を読んだ。

後半で友人の一人が、嗚咽とともに崩れた。

花々に包まれた柩の下には、生前愛用していた帽子や手帳などが、無造作に置かれていた。

「ホントに、しょうもナイもんばかり、作って」

誰かがハンケチで目頭を押さえながら、つぶやいた。泥んこ遊びで服を汚す子供をなじっている母親の口調で。

柩を見ているうちわたしは何だか、経堂のギャラリー『伝』の個展で展示されたオブジェ作品のひとつを思い出した。

箱の中のアクリルの水に、半ば浸かった卵がひとつ、斜めに浮かんでいる作品だ。何ということもない立体作品だが、実物の卵だから、そこにはひとつの生命の死が、閉じ込められていたはずだ。朧げな記憶のように、まといつく水。

紫色の線香の煙を背景にして、生前彼が作ったオブジェたちが、いつのまにか柩の周りに森の精霊たちのように寄り集まって、ひしめき合う気配がする。

ポコポコととぼけた音をたてるゼンマイじかけの木魚。時計を壊して作った自動抹茶装置。古びたビニール人形を入れた行商用の背負いの筆筒。機械じかけの七福神。作られなかった屋台のアイデア。そして永眠している小さなペットたちの棺。

日本の民家の納屋の片隅で忘れ去られたようなガラクタの中から、岡本さんはユーモラスで呪術的で、詩的なオブジェ

を作った。ノスタルジックな、ジャンクアート。それらは商売や経済活動という実利的行為をおちょくり、ワビサビの伝統美を批評し、われわれの潜在意識や記憶の古層に訴えかけた。

今日のようなマスメディア全盛の企業社会の中では、ディレクターやプロデューサーといった存在によって、ほとんどの疑似創造活動が演出される。そのような環境の中で、岡本力は、まぎれもなく主体的な表現行為をなしえた希有な造形

詩人であった。そこにはプランニングも編集会議も経ない、手製のイメージと個的な創造だけがあった。

飲み仲間の一人である書家の鈴木啓義氏は、「岡本さんの作品は、どこを切っても金太郎飴でオカモトさんだからな。そこが羨ましいヨ」といった。

作者の存在の刻印以外、何も表現していないというのは貴重なことだ。またそれは、目論んで可能になる、という性質のものでもない。

しかし多くの作品が本人によって解体され失われてしまった今、もっともよく造形しえたのは「岡本力という生き方」だったかも知れない。

それは何ものにも属せず、孤独なまま宙吊り状態に耐え続けるという、通常は躊躇せざるをえないような、ぎりぎりの生のスタイルだった。

これはしかし、恐るべきコンセプチュアルアート、ではないか。

残された者の脳裡からは、夕闇の中、屋台を引いている前屈みの男の小さな黒いシルエットが

、いつまでも消え去らないだろう。

オブジェめいた柩の中から、あの年齢を失ったような嘆れ声が聞こえてくる。

——カ、カタチあるものは、いつか、壊れますから——。

(1997年)

無寸草主人

<http://p.booklog.jp/book/23469>

著者 : Grasshouse

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/grasshouse/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/23469>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/23469>